

[成果情報名]イチゴ長崎型高設栽培「さちのか」における天敵放飼によるハダニ類防除

[要約]イチゴ長崎型高設栽培「さちのか」において、カブリダニ類（チリカブリダニまたはミヤコカブリダニ）を11月中旬～下旬、2月下旬、3月中旬～下旬の3回定期的に放飼することで、ハダニ類の発生を長期間抑制できる。また、ミヤコカブリダニは、冬期にチリカブリダニより多く定着する。

[キーワード]イチゴ、長崎型高設栽培、さちのか、ハダニ類、天敵、カブリダニ類

[担当]総合農林試験場・環境部・病害虫科

[連絡先]電話（代表）0957-26-3330、（直通）0957-26-4413

[区分]野菜（生産環境）

[分類]普及

[背景・ねらい]

近年、イチゴの生産においては、高設栽培の導入により、省力化や規模拡大が図られている。また、安全・安心な農作物の生産が求められており、これまで地床栽培においては、重要害虫であるハダニ類に対してチリカブリダニなどの天敵利用が検討され、技術確立しつつある。しかし、栽培様式を大きく異にする高設栽培においては、これら天敵利用に関する知見は少ない。さらに、本県では栽培品種の「とよのか」から「さちのか」への転換後、ハダニの発生様相に大きな変化がみられ、高設栽培の「さちのか」においては、ハダニ類が多発しやすいことが明らかになっている（図3、ながさき普及技術情報第25号、2006）。

そこで、ハダニ類が多発しやすい長崎型高設栽培「さちのか」において、ハダニ類の天敵利用による防除技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

- 1．イチゴ長崎型高設栽培「さちのか」において、天敵（チリカブリダニまたはミヤコカブリダニのどちらか）を11月中旬～下旬、2月下旬、3月中旬～下旬に放飼することで、ハダニ類の発生を長期間抑制できる（図1、図2）。
- 2．ミヤコカブリダニは、冬期にチリカブリダニより多く定着する（図2）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．チリカブリダニやミヤコカブリダニの放飼前は、ビニル被覆後、薬剤散布等でハダニ類の密度を低下（寄生株率10%、複葉当たり0.5頭以下）させる。カブリダニ類の放飼はその約2週間後に行う。ハダニ類の密度は、ほとんど発生なしが望ましい。また、放飼前の薬剤の影響日数に注意する。
- 2．具体的な放飼時期は栽培やハダニ類の発生状況によって変わるが、ハダニ類の密度が増加する前にスケジューリング的に放飼する。
- 3．ミヤコカブリダニは、飢餓耐性が強いいため、ハダニ密度を低下させた後の11月放飼に適する。
- 4．放飼量は1回当たり4000～6000頭/10aを目安とし、秋期の放飼は特に充分量放飼する。
- 5．天敵の利用期間中は、他の病害虫防除において天敵に影響の少ない防除体系とする。
- 6．カブリダニ類のコストは4000～6000頭/10a放飼の場合、1回当たり約13,000～19,000円である。

[具体的データ]

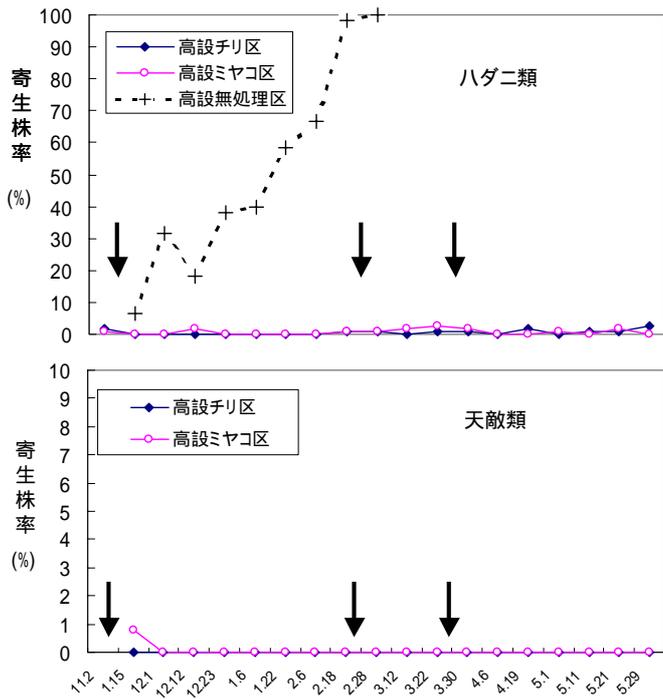


図1 各体系区におけるハダニ類と天敵類の発生(2005年産)
 矢印は天敵の放飼
 チリ区:チリガリダニ11/10、2.28、3.30 6000頭/10a
 ミヤコ区:ミヤコガリダニ11/10、2.28、3.30 6000頭/10a
 調査株数各区120株、最低温度8、地温16

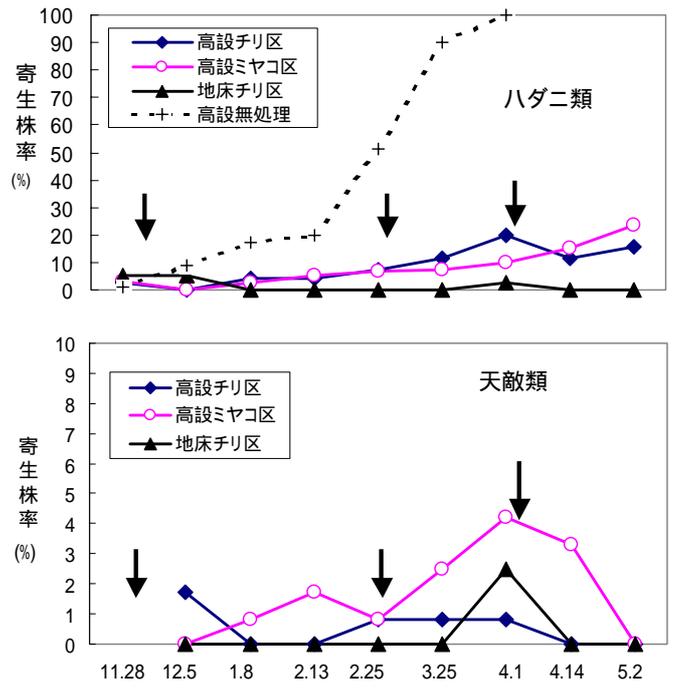


図2 各体系区におけるハダニ類および天敵類の発生(2006年産)
 矢印は天敵放飼
 チリ区:チリガリダニ11/30、6000頭/10a、2.27、4.3、4000頭/10a
 ミヤコ区:ミヤコガリダニ11/30、6000頭/10a、2.27、4.3、4000頭/10a
 調査株数各区120株、最低温度8、高設の地温16

頭/複葉

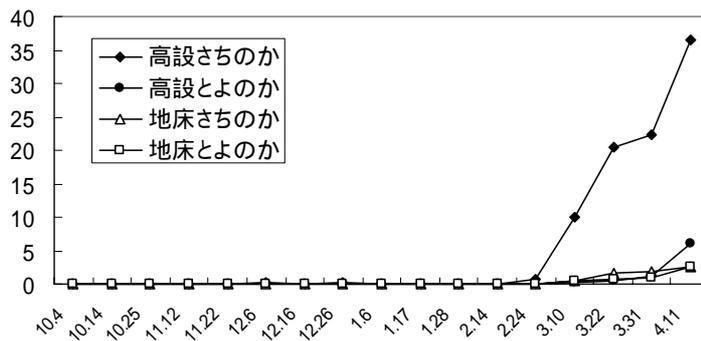


図3 各栽培様式(無防除)におけるハダニ類の発生状況(2004年産)

[その他]

研究課題名：イチゴ高設栽培における病虫害の効率的・総合管理技術確立

予算区分：県単

研究期間：2004～2007年度

研究担当者：小嶺正敬、内川敬介